

42) 当科における慢性膵炎の手術症例の検討

大谷 哲也・川瀬 忠 (厚生連中央総合
金沢 信三・斉藤 聡郎 病院外科)
角原 昭文

当科では慢性膵炎に対し15例の手術療法を経験したので、手術成績及び外科的療法の問題点等報告する。成因はアルコール性膵炎が10例と最も多く特発性膵炎が4例その他1例である。術式は膵管空腸側々吻合術8例、膵嚢空腸吻合術1例、膵尾側切除術2例、膵全摘術1例、膵頭神経叢切除術1例、総胆管十二指腸吻合術2例である。術後除痛効果は、膵管空腸側々吻合術8例のうち消失5例、軽快5例と良好であった。術後内分泌機能悪化例は3例にみられ、2例は飲酒再開のためであり1例は膵全摘術施行例であった。社会復帰不良例は、飲酒再開によるアルコール依存症患者が多く、従って疼痛が消失しても禁酒と糖尿病の control を主体とした嚴重な患者の指導管理が必要である。

43) 外傷性膵のう胞の一治験例

若桑 正一・五十嵐喜義 (栃尾郷病院)
田宮 洋一・塚田 一博 (外科)

外傷性膵のう胞が急性膵炎発作により十二指腸へ内瘻化し、のう胞の縮小消失した症例を経験したので報告する。

症例は72才の男性。既往歴で特に異常ない。

〔主訴〕上腹部激痛と腹部腫瘤。

〔現病歴〕3mの高さより転落し受傷。翌日腹痛を訴え当科受診する。上腹部に16×14cm 大弾性硬の半球状腫瘤を触知したが、中下腹部は平坦、軟であった。白血球数17900、血清アミラーゼ715単位で、腹部エコーで7×5cm大のう胞を認め、外傷性膵のう胞と診断入院となる。

〔臨床経過〕禁食とIVHで管理し膵安静を保つが、19病日上腹部激痛、消化管出血とショック状態となり、この時の血清アミラーゼは2382単位であった。しかしこの急性膵炎発作後上腹部腫瘤の縮小を示し、上部消化管造影で膵のう胞の十二指腸への内瘻化を認めた。

以後腫瘤は次第に縮小し、経過順調に退院となった。

44) 地方2次救急病院における腹部外傷の経験

星山 圭鉦 (金沢病院外科)

柿崎市羽羽地区の2次救急病院の一つである当院で過去6年間に経験した腹部外傷について報告する。比較的重症と判断された症例は17例あり、13例は手術的治療に

より救命、治癒をみたが、2例は手術に至らず死亡した。受傷機転は交通事故によるもの14例、労災1例、喧嘩によるもの1例、自損事故2例である。受傷臓器は、空回腸破裂5例、肝破裂3例、膵挫傷、破裂2例、脾破裂2例、直腸S状結腸破裂1例、外傷性横隔膜破裂1例、腎破裂2例である。

損傷臓器数は、1臓器8例、2臓器2例、3臓器以上3例であった。

最近腹部外傷単独の症例は少なく、多発外傷による一つとして腹部外傷を併う例が多いようであり、適切な初期治療が重要と思われる。

最近経験した、脾破裂外傷性横隔膜破裂、膵破裂、膵嚢形成例、ハンドル外傷の3症例を供覧する。

45) 分娩直後に発症した特発性肝破裂の一治験例

伊賀 芳朗・三輪 浩次 (臨港総合病院)
浅井 正典 (外科)
佐々木公一 (新潟大学 第一外科)

妊娠および分娩に合併する原因不明の肝破裂は稀ではあるが、診断と治療の困難さから、その母児死亡率は極めて高い疾患である。今回我々は、正常分娩後に肝破裂を来した症例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症例は34才2回経産婦で、双児を出産直後、上腹部の激裂な疼痛と共に shock 状態に陥り、試験開腹に依って本症と診断された。当科転送後直ちに再開腹し、大網充填による止血とドレナージ手術を施行し、救命し得た。

本症の原因について多くの報告は、妊娠中毒症による血管内凝固異常を重視し、また早期診断のためには、妊娠後期および分娩直後の右季肋部痛を訴える妊産婦については、常に本症を念頭に置くことが重要であると強調している。今回救命し得た理由として、発症後比較的早期に診断し得た事と、症例が既に分娩後であったことが、大きく関与したと推察される。

46) 肝嚢胞腺癌の1例

佐藤 好信・内藤 真一 (鶴岡市立荘内病院)
鈴木 伸男・斎藤 博 (外科)
石橋 清・由岐 義広
深瀬 真之 (同 病理科)

症例は67才の男性で、既往歴として53年11月に、当科で直腸癌の手術(Ra, 高分化腺癌, ss, Po, lyo, vo, Ho, M(-), n(-), ow(-), cw(-), 絶対治癒切除)を受けている。今回は右季肋部の膨満感を主訴とし

て受診し、エコーおよび CT にて肝右葉に大きな嚢胞様病変を認め、エコー下穿刺細胞診で腺癌の診断を得て、61年2月13日に肝右葉切除術を施行した。切除肝の重量は2120gであり、嚢胞は15×13×13(cm)の大きさで、中に1270mlのカフェオレ様の液体を含み、壁は線維性の厚い結合織から成り、内面は高円柱状腫瘍細胞で覆われ、その所々が乳頭状に増殖し、また一部において周囲

の肝組織に浸潤していた。組織学的に直腸癌細胞との判別は困難であったが、直腸癌の手術後7年を経過していることや、上述の如く単発性の巨大嚢胞を形成し、主として内腔側で増殖していることなどから、肝原発の嚢胞腺癌と考えた。なお術後経過は良好であった。以上稀な1例について報告する。
